〔書 評〕

山口幸洋著

『日本語方言一型アクセントの研究』

木 部 暢 子

1. はじめに

本書は『日本語方言一型アクセントの研究』と題されるが，本書の内容は決して一型アクセントの研究にとどまるものではない。著者山口氏の意図はむしろ，日本語諸方言全体を視野に入れた，氏独自の日本語諸方言アクセント成立説を提示することにある(ただしアイヌ語と沖縄方言は除かれている)。氏独自の日本語諸方言アクセント成立説（以下「山口説」と呼ぶ）とは，すなわち日本語諸方言は一型（無弁別）アクセントを祖とし，これが外からの強力な言語の「絶えざる伝播侵食」を受けることによって，各地で「他律的」な型獲得変化が起こり，その結果現在のような諸方言アクセントが成立した（第12章）というもので，いわゆる「学界の定説」と比べると，祖体系から各地で起きた変化の方向に至るまで，ことごとく逆の見方で構成されている。

いわゆる「学界の定説」とは，日本語諸方言アクセントは型の区別の多い体系（例えば『類聚名義抄』のようなもの）を祖とし，各地で型の統合変化が起きた結果，現在のような諸方言アクセントが成立したというもので，ここでは，一型アクセントは最も型の統合変化の進んだアクセントと位置づけられる。

ところで，このような「学界の定説」に対しては，これが「定説」になる以前から山口氏は異議を唱え続けてきた。しかし，学界の大勢は山口氏には与せず，現在に至った。その意味で，本書は山口氏の40年にわたる「定説」への抵抗史とも言うことができる。

本書の趣旨は，以上のように極めて明快なのだが，論証過程にはいささか疑問を抱かざるを得ない点がある。それに伴って，本書の結論にも疑問を抱かざるを得ない点がある。以下，それについて述べていくことにする。

なお，本書は12の章からなるが，第1章から第11章までは一型アクセントの諸特徴を明らかにするために書かれ，それを踏まえて第12章で山口説が述べられる。この書評では本書の中心をなす第12章を重点的に取り上げ，それ以外の章については割愛する。その他の章のおおまかな内容については，末尾掲載の目次を参照されたい。

2. 一型アクセントに周圏論的解釈を適用することに対する疑問

まず，日本語諸方言の祖は一型であるという，その根拠は何かというと，「第一の根拠

は，やはり言語地理学である。……言語の遠隔分布が『相対的古形』であるというテーゼはやはり尊重されるべきものと思う」(394頁)とあることから分かるように，南奥羽，北関東，静岡，福井，愛媛，九州，八丈島といった遠隔地に分布する一型アクセントを周圏論的に解釈して，これを古いとするところにある。遠隔地分布の原理をもって一型アクセントを相対的に古いと見る意見は，古くはラムゼイ 1955，グロータース 1956 にあるといい，最近では小泉保 1998 にも見られる。しかし，一型アクセントに果たして周圏論的解釈を適用することができるものだろうか。

これに関しては，高山倫明 2000 の次のことばを引用したい。

「周辺分布の原則は，言語的交通のない遠隔地に，同じ形式で同じ意味をもつ語が偶然に存在する確率がきわめて低いことを前提に，その合理的解釈として過去の連続性(地理的にではなく形式の)を推測し，結果としてそれを分断する形式を相対的に新しいと認めるものである。ここにも言語記号の恣意性という前提がある。一型アクセントが離れて存在していても，一型であるがゆえに体系間の対応を示し得ず，両者の有縁性を主張することはできない。したがって，それを分断する体系より相対的に古いという帰結も得ることはできないのである。」

一型アクセントに周圏論的解釈を適用することの是非についてはこれに尽きるが，ここでは「対応関係」をめぐる本書の矛盾について指摘しておきたい。本書は次のように言う。

「ここで翻って『一型アクセント』なる方言が，果たして四型なり三型なりの体系と『対応する体系』なのかどうかを考えなければならない。4>1 あるいは 3>1，あるいは 2>1 が『対応関係』と言えるかどうかという問題である。一型アクセントが『不対応』の方言だとすると，ことはきわめて重大で，少なくとも，類聚名義抄アクセント以後の『系譜』は問題でなくなる。」(398頁)

つまり，4>3 や 4>2 ならば四型の区別は三型や二型に継承されているから，四型と三型，四型と二型の間には「対応関係」があり，従って三型や二型は四型から生じたと考えなければならない。しかるに，4>1，3>1，2>1 の場合は，四型，三型，二型の区別が一型に継承されているとは言えないから，四型，三型，二型と一型の間には「対応関係」があるとは言えない。従って，一型は四型，三型，二型から生じたものではないというのである。

一型が四型とも三型とも二型とも「対応関係」にないというのは，比較対照の原理からいって当然のことで，さらに言えば，一型は一型とも「対応関係」にない。ところが，本書は一型と四型，三型，二型との「非対応」を認めながら，一型と一型との間に「対応」があるとして周圏論的解釈を適用する。内部矛盾と言わざるを得ない。

3．「統合規則」批判に対する疑問

次に，「統合規則」を批判する次の箇所にも疑問がある。

「(1) F⇔ED 間のギャップ【ⅠⅣ/ⅡⅢ/Ⅴ⇔Ⅰ/ⅡⅢ/ⅣⅤ】
(2) ED⇔C 間のギャップ【Ⅰ/ⅡⅢ/ⅣⅤ⇔ⅠⅡ/Ⅲ/ⅣⅤ】

つまり，(1)の前後関係を想定するとき，F で区別がないⅠⅣが E に至って，その内のⅣだけに区別が生じて今度はⅤと統合することが『統合規則』に反している。(2)も，そこに前後関係を想定するとき，E で区別がないⅡⅢが DC に至って，その内のⅡだけが分離して今度はⅠと統合しているのが『統合規則』に反するのである。」(397 頁)

(1)は岐阜県や兵庫県における垂井式 (F) と内・中輪東京式 (ED) の接触地帯，(2)は静岡県や福岡県・大分県における内・中輪東京式 (ED) と外輪東京式 (C) の接触地帯を指している。しかし，「統合規則」ではこのような場合，⇔の左と右に「前後関係を想定」しない。普通，以下のような仮説を立てる (徳川宗賢 1962)。

(1′) *X〔Ⅰ/ⅡⅢ/Ⅳ/Ⅴ〕
F 〔ⅠⅣ/ⅡⅢ/Ⅴ〕 ED 〔Ⅰ/ⅡⅢ/ⅣⅤ〕

(2′) *Y〔Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ/ⅣⅤ〕
ED 〔Ⅰ/ⅡⅢ/ⅣⅤ〕 C 〔ⅠⅡ/Ⅲ/ⅣⅤ〕

従って，(1)(2)をもって「統合規則」の批判とするのは当たらない。

ただ，この部分の山口氏の批判は，おそらく「移行性分布」を念頭に置いての批判だと思う。「移行性分布」とは，異なる体系 A と B が接するとき，A と B がある線を境としてきっぱりと分かれるのではなく，A から次第に B 的なものへ，そして B へというように「連続的に移りかわる分布」(山口 1982) を示す状態を言う。このような現象は，確かに「自立的変化」や「統合規則」では説明がつかない。山口氏の言うように，外部方言の摂取による「他律的変化」で説明するしかないだろう。

しかし，それはあくまで局所的な現象であろうと評者は考える。例えば，(2)における「移行性分布」は (2′) のような過程で〔Ⅰ/ⅡⅢ/ⅣⅤ〕と〔ⅠⅡ/Ⅲ/ⅣⅤ〕が分派したのちに，この地域において二つの体系が接触することにより生じた新しい現象と考えることができる。現に福岡県・大分県では，高年層や非都市部に〔ⅠⅡ/Ⅲ/ⅣⅤ〕が多く，若年層や都市部に〔Ⅰ/ⅡⅢ/ⅣⅤ〕が多いという現象が見られるが，これはこの地域の「移行性分布」が最近になって起きた局所的な変化であることを示している。

「移行性分布」については，そもそも山口氏自身，かつて「移行性分布に対する解釈を拡大して全国分布の解釈に利用することはありえない」(山口 1982) と述べていたのに，本書では「移行性分布」の考え方が全国分布の解釈にどんどん入り込んでいるように思える。考えを変えられたのだろうか。

4. 型獲得過程に関する疑問

第三に，山口説の最も根本的な部分，一型の人々がいかにして二型を獲得し，二型の人々がいかにして三型を獲得したかについての疑問である。これに関する山口氏の説明

は，きわめて漠然としている。

まず，諸方言アクセントの分布を「ABCDEFGFEDCBA 分布」（A：一型，B：準二型外輪式・二型，C：三型東京式外輪，D：三型東京式中輪，E：三型東京式内輪，F：準二型・三型近輪式，G：四型近畿）と認めた上で，氏は次のように述べる。

「これから想像されるストーリーは，A 一型（無弁別）『前弥生（縄文？）』アクセント言語圏に G 五型類聚名義抄アクセント言語が外部から飛び込んできて，A がその強力な中央弥生文化を象徴する中央弥生語（原始日本語＝大和言葉）を受け入れるに当たり，初歩的な型の弁別習慣を獲得し確保したのが B であり，その B が一段と G を受け入れて C が出来る。その間，本元の G の体系は，型減という類別体系の中和となった補忘記アクセント〈I/IIIII/IV/V〉によって，C の二拍名詞類別体系に影響し D 化し，それが一拍名詞類別体系にまで及んだのが E である。G は，さらに E に影響して F が出来る。その変化過程は，動詞形容詞という用言の弁別体系，各文節単位の活用形アクセントの体系において，一，二拍名詞アクセント体系以上に明確に認めることが出来る。大きな流れは，G の絶えざる伝播侵食ということにあったのである。」（400—401 頁）

ストーリーとしてこのようなことがあり得ても，具体的なプロセスが示されない限り，このようなストーリーをすぐそのまま受け入れることはできない（高山 2000 に「学問は結果の当否よりも論証過程だと思うのである」とある）。しかし，無い物ねだりをしても仕方がないので，ここではいずれ氏（あるいは氏の後継者）が具体的なプロセスを示してくれることを期待して，その際に明らかにしていただきたい事柄を，紙幅の関係で，二つだけ述べておきたい。

まず一つは，「A が G を受け入れ B ができる」というとき，その変化が起きた場所に関することである。山口氏によると B の分布地域は西南部九州と福井である。福井は G に隣接しているからいいとして，九州の場合は G が九州まではるばるやってきて B を生んだわけではないだろう。それだと，九州北東部の C や中国地方の D は，西国にやってきた G の子孫ということになり，「定説」とほとんど変わらなくなる。とすると，B は G のすぐ周辺，つまり F の辺りで生まれ，九州まで伝播したということになるのだろうか。同じ疑問は，B と G から C が出来るときも，C と G から D が出来るときも，D と G から E が出来るときも，E と G から F が出来るときも生じてくる。

ここで重要なのは，型獲得変化が常に G の周辺で起きていること，そして G の東側と西側は地理的に非連続であるということである。離れた二地点で同じ型獲得変化が何度も起きる蓋然性については，納得のいく説明が必要である。もっとも，もしこの変化が異言語の接触するところでごく普通に起きる，きわめて一般性の高い変化であるとすれば，上の蓋然性はだいぶ高くなる。

そこで第二の質問だが，「A が G を受け入れるに当たり，初歩的な型の弁別習慣を獲得し確保したのが B」というときの，「初歩的な型の弁別習慣」とは何なのか。本書から推

測するに，具体的には二拍名詞Ⅰ・Ⅱ類とⅢ・Ⅳ・Ⅴ類の区別を指しているようだが，この区別が「初歩的な型の弁別習慣」であるとは，何をもってそう言うのか。

評者は以前，東北，出雲，九州など二拍名詞Ⅰ・Ⅱ類が合同する方言は，『名義抄』の「式」と「核」の二つの弁別特徴のうち「式」の特徴を優先的に選択した方言である旨，述べたことがある(木部 2000)。従って，本書のいう「初歩的な型の弁別習慣」がもし「式」を指しているのだとすれば異論はない。ただし，評者は比較言語学的立場に立つゆえ，山口説とは根本的なところで異なる。

話を第二の質問にもどそう。第二の質問は，Bの誕生だけではなく，C，D，E，Fすべての誕生について，そのプロセスを説明しなければならないから，かなりやっかいな質問には違いない。しかし，これが解明されないかぎり，ストーリーはストーリーのままなのである。

5. 逆周圏論に対するアンチテーゼとして

このように見てくると，山口説は周圏論的分布に端を発するとは言っても，方言周圏論とはまったく異なる理論であることが分かる。おそらく，氏はこのことを承知の上で，自説を周圏論と結びつけて提唱したのではないかと思う。というのは，山口説は根本的に，逆周圏論（日本語諸方言アクセントは中央部ほど古く，周辺部ほど新しい）に対するアンチテーゼとして書かれているからである。「ABCDEFGFEDCBA」という分布パターンを逆周圏論ではなく周圏論で解釈しよう，細かいことは置いておいて，というのが山口氏の当初の目論見ではなかったかと思う。

しかし，逆周圏論を論破するためには，クリアしなければならない壁があった。『名義抄』などの文献資料に照らし合わせると，明らかに近畿が古体を示すという壁である。これをクリアするために，一型アクセントを「前弥生アクセント」として一方の祖と位置づけ，名義抄アクセントを「原始日本語＝大和言葉」としてもう一方の祖と位置づけ，その中間に分布する諸方言アクセントを一方の祖がもう一方の祖を受け入れることによって生じる中間形と位置づけた。山口説のあらすじは，以上のようなものである。

逆周圏論に関しては，これまで評者も強い疑問を感じてきたので，山口氏の上のような考えには共感するところがある。特に，二拍名詞Ⅰ・Ⅱ類の合同する方言が東北，静岡，出雲，九州といった周辺部に分布することを示す山口 1982 の図 14 には，大いに刺激を受けた。ただし，評者は「前弥生アクセント＝一型アクセント」を設けずとも，周辺部のアクセントが古体を示すことが証明できると思っている（木部 2000)。

また，一型アクセントはやはり古体ではなく新しい形だと考える。一型アクセントには周圏論が適用できないことについてはすでに述べた通りだが，実際の音調パターンからいっても，一型は周囲の有型から変化したと考える方がよい。九州を例にとれば，熊本の一型は久保智之 1990 の指摘する福岡市方言の音調パターンにきわめて近いし，都城

の一型は鹿児島のB型に近い。そして，これらは北関東の一型とは異質である。各地一型は，山口氏のいうようには類似性を持たないと評者は思う。

以上のような意見の違いはあるにしても，本書から得るものは大きい。

なお，山口氏は最近，二拍名詞に5つの型区別を持つ伊吹島のアクセントについて，古体を示すものではなく，接触により他律的変化を起こした新しい形だという内容の発表を相次いで行なった。これも本書の延長線上にあることを付け加えておく。

『日本語方言一型アクセントの研究』目次

第1章　一型アクセントの認識　日本方言に占める位置
第2章　文アクセント論の展開　用語，観念，単位
第3章　調査票調査の功罪　解釈の混乱
第4章　不確定性(1)　静岡県井川・笹間における実験的調査
第5章　不確定性(2)　群馬県邑楽郡，館林市，栃木県佐野足利地方の調査
第6章　民間の定評　一般の方言認識と学問の対応
第7章　全文平板性(1)　無差別平板調をめぐって
第8章　全文平板性(2)　八丈方言の分析試案
第9章　疑似語アクセントの意味　共通語アクセント獲得による変質
第10章　分析的特徴　イントネーションの比較
第11章　談話資料の活用　一型アクセントのデータベース
第12章　一型アクセントの本質　通時論的考察のために
談話資料編
索引

引用文献

久保智之 1990「福岡市方言の問い返し疑問文のアクセント現象」『日本語音声』研究報告3
高山倫明 2000「日本語音韻史の方法」明治書院『日本語学』19-11
徳川宗賢 1962「“日本諸方言アクセントの系譜”試論――「類の統合」と「地理的分布」から見る――」『学習院大学国語国文学会誌』6
山口幸洋 1982「アクセントにおける移行性分布の解釈」『国語学』130
木部暢子 2000『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版

(1998年12月25日発行　ひつじ書房刊　A5判　607ページ　本体価格19,000円)

――鹿児島大学教授――

(2001年9月3日　受理)